

プラトンの知識論

Platon's Theory of Knowledge

今 井 直 重

(一)

プラトンはポリテイアの第七巻において次のごとくにのべている^①。人々が洞窟のような部屋に抑留されていると仮定しよう。そして人々はこの部屋の中において脚と頸を縛られて子供のときから居住している。それゆえに人々は実際に同じ場所に留まっており、彼等は前方に彼等の目を向けるだけで、その他の方向にあるものを一切見るができないのである。彼等には一つの射光が与えられている。それは背後の上の方の遠いところから射してくる火の光である。縛られている人々と光源である火との間に、上の方に光の通路があって人々の前には光に照らされた影を写す障壁が設けられている。かくのごとき状態において、外の方からあらゆるものが、人々の前方に設けられた壁にその影を投げかける。これらの人々は洞窟のうちに束縛されて、唯前方の壁に投写された、ものの影像しか見ることができないのである。すなわち、彼等はいつも火の光が彼等の面前に立っている洞窟の壁に投げかける陰影(αἴσκιός)を見るのみであって、それより他のもの(本もの)を見たことがないのである。もしこういう状態が一生つづくとしたならば、人々は一生涯全く壁に写る通りすぎて消えてゆく陰影のみを見て、それより他のもの、すなわち、かかる陰影を投げかけるところの真のものを見ないで過ぎてしまうのであろう。

しかし、もしこれらの縛られている囚人の後方を通りすぎてゆく人達が話しながら通りすぎてゆくとすれば、囚人達は、彼等の前の壁の上を通りすぎてゆくところの影よりも他に何かがあるということを見出すであろうと考えられる。すなわち縛られている囚人達は壁に写った影よりほかに、隠すことのできない

もの (τὸ ἀληθές) を見出さないわけにはゆかなくなるであろう。これらの囚人達は全くの束縛から解かれ、それだけ全くの無知 (ἀφροσύνη) から癒やされることになるのである。

先ず最初の段階においては、人々は洞窟内で壁に向って縛られており、彼等の目に触れるものはその前壁に映す影よりほかにはないのである。 οἱ τοιοῦτοι οὐκ ἂν ἄλλο τι νομίζοιεν τὸ ἀληθές ἢ τὰς τῶν σκευαστῶν σκιάς.

囚人達が前方の壁に映った影よりもほかになお隠れないもの (τὸ ἀληθές) を見出すことによって、今やある意味において前よりは遙かに自由であるが、それでもまだ洞窟内に閉じこめられたままである。そこでこれを契機として彼等はおとなしく縛られたままでじっとしていないで、これからはあらゆる方向に身を向けかえるように努力をする。すなわち今まで彼等の前方の壁に映った影だけであったが、こんどはその影を投げかけた実像を見る可能性が開披されるのである。以前にはただ影だけを見ていた人々は存在する真のものにより多く近づくことになる^③。(μᾶλλον τι ἐγγυτέρω τοῦ οὐτος) この場合に洞窟内での人工的な火の光の中においてでさえも、もはやその射映を通りこして、形相 (εἶδος) までも看破することができるに至るのである^④。眼が影像の束縛から解放される時に、そのような境地に入った人はうわべから脱してより真なるもの (ἀληθ-είσπρα) の領域に入り込むことになる。

影像の領域から真の光の領域にまで解放されると、最初のうちは解放された人々を眩惑しそうになる。眩惑された人々は、今にしてはじめて以前見ていたものが、単にこの火の光の中にある事物の射影にすぎないということも最初のうちは充分に理解することができる状態にあるのである。それゆえに当分の間は混乱が生ずることもある。しかしかかる混乱は以前の虚像を実像と見ていた混乱に較べると、未だ知りも見もしなかったもの、すなわち固定した輪廓をもった恒常的なもの、より真なるもの (ἀληθείσπρα) を見出すことができるのである。

かくて束縛から解放された人は洞窟の外にすなわち、開かれた、自由な場所に移ってゆく。かくして解放され人々は太陽の光の輝きわたるところの場所である。ここにおいては、一切の事物の本質 (Wesen) であるところの形相 (εἶδος) を宿しながら、個々の存在するものは、このもの、あのものとして存在して

いるのである。これらはすべて真なるものといわれるもの (τὰ νῦν λεγόμενα ἀληθῆ) であり、それは最も真なるもの (τὰ ἀληθέστατα) である^⑥。ここにおいては人々は最も真なるものに眼を向ける人々 (οἱ εἰς τὸ ἀληθέστατον ἀποβλέποντες) とよばれることになる。

ここにプラトンの教育 (παιδεία) の理念がのべられているのである。教育は最も真なるもの、すなわち、本当の真理の領域においてのみ、またこれを基礎としてのみ行われることができるのである。すなわち教育の本質は真理の本質に基づいているのである、ということが出来る。教育の本質は人間の魂の転向への導き (περιαγωγή ὅλης τῆς φύχης) である。

真なるものは、偽りによって隠されている状態にいつまでも甘んじているのではなく、常に必ず、偽りを破って隠された状態から、これを克服して真なるものの領域に導き入れられるのである。すべて真なるものは隠されているところから、これと闘争して勝ちとられたものであるということが出来るのである。洞窟の暗いところから明るい白昼の自由なところへ出てゆくことが真なるものを勝ちとる戦いなのである。すなわち隠されていないところのものを勝ちとることがアレチア (τὰ ἀλήθεια) に達することなのである。この場合に本質的な問題として迫ってくるものは人工的な火の光の領域から太陽の光の明るみへと上昇してゆかねばならないのである。これらの譬喩において、プラトンは人間の知ることの種々の段階を説いているのである。彼は洞窟内の火、火の光とその影、洞窟外の明るさ、太陽の光に擬らえて、人間の知識の種々の段階をのべようと試みているのである。真なるものほど、それは、それ自身をあらわ(顕)にしている真なるもの種々の段階における顕現であって、それが顕現するところの形相 (εἶδος) に近づきつつ自らを顕わ (ιδέα) にしているのである。形相 (εἶδος) は一切の存在するものの理念として、太陽が照るごとくに純粹なる意味における照輝 (shauen) である。イデアはかくのごとくに照輝し得るものである。それは一つの光輝 (λαμπρός) である。すべてのものはこのイデアの光とそれに向けられた眼に対しては隠されることなく顕わにされ、真なるものが、認識されるもの (γίγνωσκόμενον) として捉えられるのである。ものを認知 (νοῦς) または認知すること (νοεῖν) は理念へとつながることを意味するので

ある。かくのごとくに理念に本質的に正しく自らを向けることが認知の本質であり、またそれは理性の本質でもあるのである。また眼は自ら輝き照輝に適合し、そこに顕われるものを受容し、それを認知することができる。すなわち、認識されるものを顕わにして、他方認識するものに認識する能力を与えるものが善のアイデアである。^⑦ (τῷ γιγνώσκοντι τὴν δύναμιν ἀποδιδὸν τὴν τοῦ ἀγαθοῦ ἰδέαν φάθι εἶναι)

かくしてプラトンは譬喩をもって善のアイデアを光り輝く太陽をもって具体的に表現せんと試みたのである。アイデアとしての善は太陽のごとくに精神の王国を照輝するものであり、一切のものをその光によって見えるものとし、それによって知り得るものとする。見えるものの領域においてすべてのものを見るようにし、知り得るものの領域においてすべてのものを知り得るようにするものが善のアイデアの働きである。^⑧

善(τὸ ἀγαθόν)は単に道徳的なる狭い意義においてのみならず、もっと広い意義に用いられているのである。しかし善はそれが倫理的な理念として、倫理的な法則として考えることは妥当なことであることはいままでもない。それは最もよく倫理的な法則に適合するからである。更に善をもっと広い意義に解して、一切の価値理念の体系の最高基準を示すものとして用いられていることも妥当なことであり、また可能なることでもあるのである。一般にギリシアにおいては善は何かの目的に役立つものを意味し、また一切の利益を供与するものに与えられる名辞として用いられたのである。かくして一切の現実において存在するところのものを可能にするものであって、それらの存在物の本質として、そのものを現実存在せしめているのである。かくして理念は一切の存在をして存在せしめるのに役立つということにおいても、それは役立つもの(τὸ ἀγαθόν)である。それゆえに善(ἀγαθόν)を存在するもののうち最も照輝的なもの(τὸν ὄντος τὸ φανότατον)といわれる。^⑩

しかしそれにしても、これが善として、あらゆる理念の究極的理念(ἰδέα τελευταία)である。というのはこれにおいて理念が完成され、すべての理念の存在が統一され可能にされるからである。善は次のごとき意味において最高といわれるのである。すなわち、善の理念は他の一切の理念の存在を可能にする

という意味において最高である。そして太陽が一切の萬象に熱と光を供与して育成するごとく、一切の他の理念に理念としての価値を供与し、その苗裔(ἔκγονον)であることが認められる^⑭。太陽の光はすべての顕現するものに明るさと可視性を与えその真実性を明示するだけでなく、それと同時に温熱を与え、発生するものにその具象化を促がすのである^⑮。

一度この太陽と称する善の理念が見られることになれば(ὁφθείσα)、かかるときにあらゆる正しきもの、美わしきもの、善きものが、その形相の輝きを顕現させることが推論され得る。(συλλογιστία εἶναι) 善の理念は現存するすべてのものの最高の理念であって、一切の存在の本質として、その形相となり、その存在を保持しているのである。

善の理念が最高の理念であるということから、われわれは、私事においてであれ、公事においてであれ、洞察力をもって行動しようと心を配る者はこの善という理念を常に眺めながら行動しなければならない^⑯。人間は理念によって規定された世界において行動すべきであり、すべて行動しようとする者は先ず理念を見て行動することが必要である。また人間をして自由に自由に常に明瞭に理念を見て行動するように躑けることが真に教育(παιδεία)の本質であるといふことができる。

プラトンにおいてはイデアは光と明るさを与えて暗く覆われたものを顕わにして、その認知を許与するものである^⑰。

かつて洞窟のうちであって縛られていた人間は今や影に背を向けて真の事物の方に向うときに、影像ではなくして、真に存在するもの(ὄντως ὄν)に眼を向ていけるので、正しくものを見ることができるのである。万事は見ることの正しさということにかかっている。この正しさ(ὀρθότης)によって認識することは正しい認識となり、それは最高の理念を目指し、正しく自らを固定することになる。

善の理念はあらゆる正しいもの、美しいものの根本原因であって、その本質を可能にするものである^⑱。(πάντων ὀρθῶν τε καὶ καλῶν αἰτία) 善のイデアは真なるものを正しく見る原因である^⑲。善の理念は真なるものの認知を許与する主である。(κῆρια ἀλήθειαν καὶ νοῦν παρασχομένη) これらの二つの言説は

善のアイデアの優れた役割として認識の正しさと善のアイデアの優位性を表明されている。このことはアリストテレスも同様のことをその形而上学においてのべている。すなわち、虚偽と真理とはことながらそのものうちにあるのではなく、むしろ悟性のうちにある。(ὁὐ γὰρ ἔστι τό φεῖδος καὶ τὸ ἀληθές ἐν τοῖς πράγμασιν ἀλλ' ἐν διανοίᾳ)¹⁹ またトマス・アキナスによれば、真理は人間的または神的知性のうちに見出される。(veritas proprie invenitur in intellectu humano vel divino) 更にデカルトによれば、本来の意味における真理または虚偽はただ悟性のうちにおいてより以外にはどこにもあり得ない。(veritatem proprie vel falsitatem non nisi in solo intellectu esse posse. Regulae ad directionem ingenii, Reg. VIII)

(註)

- ① Platon, Politeia VII, 514 a.
- ② Ibid., 515 c.
- ③ Ibid., 515 d.
- ④ Ditto.
- ⑤ Ibid., 516 a.
- ⑥ Ibid., 484 c.
- ⑦ Ibid., 508 a.
- ⑧ Ibid., 508 e.
- ⑨ Ibid., 517 b.
- ⑩ Ibid., 518 c.
- ⑪ Ibid., 507 a.
- ⑫ Ibid., 509 b.
- ⑬ Ibid., 517 c.
- ⑭ Ditto.
- ⑮ Ditto.
- ⑯ Ibid., 517 b.
- ⑰ Ditto.
- ⑱ Ditto.
- ⑲ Aristoteles, Metaphisica, E, 4, 1027 b.
- ⑳ Thomas Aquinas, Quaestiones de veritate, I, art. 4.

(二)

真理 (*ἀλήθεια*) は正しいものであり、純正なるもの (*ἀρθότης*) である。アリストテレスもいうごとく真理と虚偽とは事象のうちにはなく、むしろ悟性のうちにあるのである。悟性の判断が真理と真理ならざるものとの区別のよりどころとなるのである。真理は常に明晰なるものであり、それは隠されたところのない、すなわち隠れたところの克服である。ギリシア人にとっては真理は隠されたところのない、すべてが明らかにされたものである。すなわちデカルト的にいえば、*clara et distincta* なものである。これがギリシア的な真理の性格である。*ἀλήθεια* は暗さを否定し、それを剝奪 (*privativum*) することを意味するものである。それは暗い隠されているものうちから明るみへ奪いとることを意味するのである。プラトンのようにいえば、それは洞窟のうちから明るみへ、束縛から解放されて、白日の明るみへ、自由の天地に移されることである。この真理の問題を中心的テーマとして論述しているのがテアイテトス篇である。テアイテトス篇においては知識とは何であるか (*τι ἐστὶν ἐπιστήμη*) ということが主題になっている。*ἐπιστήμη* をいう名詞の動詞である *ἐπίσταμαι* は歩み近づくことを意味するのである。それに近づくということはそれに親しくなると、それに熟達して精通するようになることである。すなわち、広く物事に通じていて、よく知っているという意味である。アリストテレスはこれを学的知識として理解している。

一般にギリシアにおける認識には見ること (*ὄραν*) と知ること (*ἐπίσταμαι*) の二つのことがらが総合されているのである。テアイテトス篇はエピステーメーとは何であるかという問によって始まっている。これに対する答は最初アイステーシス (*ἄιστησις*) である。アイステーシスは知覚の意味である。すでにのべられたようにエピステーメーはアレーティア (*ἀληθεία*) の所有であることが考えられたのである。もし知識が知覚であるとすれば、知覚なるものは真理を伴うものでなければならぬことになる。もし知覚が真理であるとするならば真理はファンタシア (*φαντασία*) ということになる。^①しかし実際にはギリシア語ではファンタシアは想像と考えられて、想像されたもの、構想されたもの、

それは一つの現象 (Erscheinung) にすぎないのである。知覚されるものはファンタシアである。真理はカントのいうごとくに知覚によって受容されなければならないのである。知覚そのままが知識でないことは勿論である。人間の受容の態度として、黒白というような色を見るのは何によってであるか、また音の高低をきくのは何によってであるかと聞くならば、それに対しては前の問に対しては目によってであり、後の問に対しては耳によってであると答えてよいと私は思うとソクラテスはのべている。^②

さて人間は或るものを何によって (*διὰ τί*) 知覚するのであるか、われわれが或るものを知覚するのは耳、眼、鼻、舌、手などである。知覚のあるところには必ずこれらのものが関係しているのである。しかし知覚をするものは眼、耳、鼻等の感官のみであろうか。われわれが或るものを見る場合にわれわれは眼によって見るとも、眼を通して見るともいうことができる。これらの二つの表現のどちらを用いてもよいのである。しかし考えてみなければならないのは本質的なことがらであって、次の答のうちどちらが適切であるかを考えてみなければならない。われわれがそれによって見るところのもの (*ὅ ὁρώμεν*) が眼であるとするのが正しいのか、それともわれわれがそれを通じて見るところのもの (*δι' οὗ ὁρώμεν*) が眼であるとするのが正しいのか。これに対してテアイテトスは答えていう。「それを通じてわれわれがそれぞれのものを知覚するところのものであるとするのが、それによって知覚するところのものであるとするよりは、むしろよりよいように私には思われる」と答えている。^④ すなわちテアイテトスはそれを通じてという方をより正しいとするのである。眼、耳、鼻等は身体のそれぞれの部分に分散されている。それゆえに知覚されたものは全身のうちに並存的に受容されているのであるといえることができる。すなわち眼によって見られたもの、耳によって聞かれたもの等が人間によって知覚されたものとするれば、人間はそれぞれの知覚について、身体のそれぞれの異なった部分へ自ら出かけて行かなければならない。かくのごときことは不可能であるから、この分散した知覚を一つにまとめるところの何ものかが存するのでなければ、知覚するものは知覚されたものを知ることは不可能である。それゆえに、種々の知覚がわれわれのうちに並存していて、それらのすべてが一つの何かあ

一つのイデア (*μία τις ἰδέα*)、すなわち、これを魂 (*ψυχή*) とよんでもよいものであるが、ここに集合していないとすれば、それは大変なことになるであろう。われわれはすべての知覚されべきものを、この一つのイデアによって知覚するのであって、この魂というイデアの器官は種々の知覚という器具を用いて総合的に知覚するのである。^⑤ 種々の知覚が魂というイデアに集合し、ここで総合統一されて知覚するのである。この総合的に知覚する魂の働きを心とよんでもよいのである。すなわち、心とはそこへすべての知覚が集合するところのイデア的な働きであるということが出来る。ここにイデアとは、或るものが何であるか (*τὸ τὶ ἐστίν*) 観得する (*ἰδεῖν*) するところのものである。イデアとはかかる観得する働きなのである。かくのごとくに心のイデアはそこに受容されたものに対して一つのある統一的な領域を準備するところの働きをするものである。それは心とよぶところの包括的領域であって、この領域はわれわれ自身に本質的に所属するところの常に同じ働きであって、外部的には眼、耳、鼻等の器官を通じてではあるが、常にこの同じ或るものによって知覚することができるのである。プラトンにおいては心とはプンケー *ψυχή* である。

かくのごとくに見るときに、眼、耳、鼻等は器官と称する通路にすぎないので、知覚するところのものではないのである。それにもかかわらずわれわれは眼において色を認知し、耳において音を認知すると考える。これらの知覚は同時に通観する (*διανοεῖν*) のである。プラトンはここにおいて両者について通観する (*περὶ ἀμφοτέρων διανοεῖν*) とのべている。すなわち一方のものを他方のものと比較して通観するのである。またここでは心は知覚し得るものの領域をいうのであって、領域的である。^⑦ 色と音とは二つの異なる知覚に属するものであるが、それらは通観することによって一つであるということが出来るのである。^⑧

しかしこれらのものは視覚を通じても聴覚を通じてもそれらについて共通なるものを把握すること (*λαμβάνειν*) はできない。^⑨ 更にまた色とか音とかいうような感覚的なものを越えたことらについての知覚はいかにして行われるのであるか。たとえば有、非有、等、不等、同、不同、奇、不奇等は感性的なものを越えたものであって、これらのものに対しては対応する器官は存在するので

あろうか。この場合は心自体が自身で直接に観取する (ἐπισκοπέειν) ように思われる^⑩。過剰に対しては固有の受容器官は存在しない。むしろ心が自らがこれに当るのである。一般的に言って身体的器官というようなものではなく、むしろ心がそれに当るのである。心は認知し得る領域を予め形成しているところの一つのイデアである。この場合においては心は本性上から自ら一つの可能的通路をもつのである。心は本来自己に与えられる他のものへの関係をするところなのである。心はかくのごとく他のものへの関係という意味において関係的存在である。この場合心は認知を行うものに対して眼を向けて見る (ἐπισκοπέειν) という意味において心自らの認知関係を現わすのである。

更にプラトンは志向されるものとして同、異、等、不等、美、醜、善、悪等についても心はそれらの相互関係に関して観察するのである。過去のものや現在のを将来のものへ関係させて類推する (ἀναλογίζεσθαι) という仕方において観察するのである。^⑪

更に研究は歩を進める。身体を通じて心に到達する、知覚は長い間の存在や効用に関して労力と陶冶の結果、それがはじめて一般に具わるようになるのである^⑫。またわれわれが身体を通じて心に到達する知覚は生れつき具わっているのであるけれども、それらの効用に関するところは長い年月をかけて、多くの労苦と陶冶を経てはじめて具わるようになるのである。^⑬

われわれが感官を通じて認知するところのものは生れつき (φύσει) のものであるが、認知に際して出会うところのものは陶冶 (παιδεία) によるものである。感官を通して印象として受けとられたものはまだそのままでは知識ではないのである。知識はそれらのものの集計 (συλλογισμός) のうちにあるのである。これらの知覚そのものはそのままでは真理に到達することはできない。知識は知覚とは質的に異なったものである^⑭。ということがわかるのである。

真理の問題と並んで研究せねばならない問題は非真理であるところの虚偽の問題である。また知識を知覚のうちを求めることは全くなさずに、むしろ心のうちに、心が存在するところのものについて、自ら働くときにもつものについて求めるべきものである。知識の問題は存在の問題である。心が存在するものへの関係において知識が求められねばならないのである。また知識に似て非な

るものに臆見 (*δόξα*) というものがある。ドクサは全くの主観的見解であって客観性のない偽知であるということが出来る。ドクサをもって知識とすることはできないのである。しかしドクサにも、**真実のドクサ (*δόξα ὀρθή*)** というものがある。これは真実の知識ではないが、**実際生活については知識と同様に真実に有効であるが**ロゴスによって**認証されていない**ということにおいて知識 (*ἐπιστήμη*) の名を冠することが不可能なのである。これについて、**プラトンは次のごとくにのべている**。すなわち、すべてのドクサ (*δόξα ὀρθή* と *δόξα ψευδής* 両方とも) は虚偽のものであるから、たとえそれが**真実のドクサ**であっても知識であるということとはできない^⑩。真実のドクサ (*ἀληθής δόξα*) は虚偽のドクサ (*ψευδής δόξα*) は勿論虚偽であるが、**真実のドクサ (*ἀληθής δόξα*)** はその実効性においては**何等真の知識と異なるところなく有益なるものである**。これについてソクラテスは次のごとくにのべている。すなわち「すべてのドクサが知識であるということとはできない。ドクサには虚偽のドクサがあるから。しかし**真実のドクサはあるいは知識と考へてもよいかも知れない**。すなわちドクサには二つの面があつて、その一つは**真実のものであり、他は虚偽のものであるから、それらのうち真実のドクサを知識であると明言することが出来るのであろうか**」^⑪といっている。また知 (*εἰδέναι*) と不知 (*μὴ εἰδέναι*) との中間 (*μεταξύ*) は存在しない。しかし**学ぶ (*μανθάνειν*)** という現象は不知から知へ移りゆく中間であり、**忘却 (*ἐπιλανθάνεσθαι*)** という現象は知から不知への移行の中間にあると考へられる。しかし今この中間のものを排除すれば、或るものは知られているか知られていないかのどちらかである。ドクサをもっている人は、彼の知っているところのものをそのものであると思わずに他のものであると思ふのである。かくすれば彼が知っていることを知っていると**思はずに他のもの**である^⑫と思ふのである。

いま考察の題目を変えて存在と非存在 (*εἶναι καὶ μὴ εἶναι*) について考察するに、一般に自分が何かについて思うとき、もし私が虚無について思うときに、私は何も思わないことと同様のことになるのである^⑬。また見ること (*δρᾶν*) は何かを見ること (*δρᾶν τι*) であり、また聞くことは何かを聞くこと (*ἀκούειν τι*) である。これと同様にドクサすること (*δοξάζεσθαι*) もまた何かをドクサす

ること (*δοξάζεσθαι τι*) である。ドクサすることは存在しないものをドクサすることは全く虚偽なもので、それ自体が無きものとならざるを得ないことになるのである。また存在と非存在との間には、互いに相排斥するものであるから中間的なものの存在する余地が存在しないのである。

知るということの中間現象の一つとして挙示されるものに学知 (*μάθησις*) という事象が存在する。学知とは、人がはじめ全く知らなかったものが後に学び知るようになることである。ここにおいて或るものに関して知と不知とが共存することになる。以前においては全くとりあげられなかった問題が中間者としてとりあげられることになる。¹⁹

更にプラトンは後にロックによって論述された知識の心理学的構成についてまたすでに中世哲学において援用された *tabula rasa* の根源をばピタゴラス学派において求められたのである。「では話を進めるためにわれわれの心の中に一つの蠟板があると仮定しよう。そしてわれわれはそれを詩神達の母であるムネモシュネの贈り物であると言おう。そしてわれわれが記憶しようと思うものを、見るものや聞くものや自分自身で考えたものうちからとって、あたかも印形付きの指輪で捺印するときのように、この蠟板をそれらの知覚や思想の下に当てがって、その押型をとることにしよう。そしてこのようにして印銘されたものは、その映像 (*εἰδωλον*) が現存する限り、われわれはそれを記憶しており、また知っているのであるが、しかし拭い去られたものや印銘されなかったものは、われわれはそれを忘却し、また知っていないことになろう」²⁰ すなわち、虚偽のドクサに対する関係において、多義的なものへ関係するところの或るものは、その認知に際して心のうちに印銘される或るものが存する。それはソクラテスの言によれば詩神たるムネモシュネの贈り物である。詩神達の母はムネモシュネとよばれる。これは記憶ということの意味するのである。記憶という贈り物は女神の持参金として人間の心の本質に存する。ものごとを記憶しているということは、そのものが現存しないときに、すなわち、現実に存在していないときに、それを自己の前に保持していることである。われわれは存在するものを直接的に現実に所有するのである。ここで問題となるのは、或る存在するものを現実的に把握するということである。われわれが或るものを現前化

するときに、われわれはそれを表象するのである。従ってこの場合われわれは一つの表象に関係しているのであり、それについて一つの形象 (εἰδωλον) をもつのである。われわれが現前化するところのものはわれわれが指向しているところのものなのである。現前化は必ずしも想起ではないが、想起は常に現前化である。現前化においてはわれわれは存在するものに直接関係する。

存在するものの存在への関係は様々の仕方である。鳩舎の譬喩はその一例を示すものである。前の心のうちに想像上の蠟板を備えつけたのであるが、今度は心のうちに鳩舎のようなものを設けてみる。それにはあらゆる種類が入っていて、そのうちの或るものは大群をなして他のものから離れており、或るものは小群をなしており、また単独で飛び廻っている^④。譬えていえば心は鳩舎のようなものである。鳩舎ははじめのうちは空虚であるが漸次種々の鳥類で充たされてくるのである。この譬喩の意味するところは現前化の領域の中で、われわれは時にはこれを、他のときにはあれを現前的にもち、そしてこれらのものを確実に把持するのである。そしてこれらのものはその特性に従って区別されるようにせねばならない。そしてすでに知覚や通観において知ったところのことがあらゆる存在するものについて至るところに見出される。そして最も多くすべてのものについて現われていたものは、いま単独で他のものの間を飛び廻っているものとして特色づけられる^⑤。それゆえに鳩舎の譬喩は次の点を明らかにしている。すなわち、存在するものの現前化は全くその範囲を逸脱することはない。またそれは固有の範囲内で常に個々のものを指向し把持することができるのである。

(註)

- ① Platon, Theaetetus, 152 c.
- ② Ibid., 184 b.
- ③ Ibid., 184 c.
- ④ Ditto.
- ⑤ Ibid., 184 d.
- ⑥ Ibid., 185 a.
- ⑦ Ditto.
- ⑧ Ibid., 185 b.

プラトンの知識論（今井）

- ⑨ Ditto.
- ⑩ Ibid., 185 e.
- ⑪ Ibid., 186 ab.
- ⑫ Ibid., 186 bc.
- ⑬ Ditto.
- ⑭ Ibid., 186 c-e.
- ⑮ Ibid., 187 a.
- ⑯ Ibid., 187 bc.
- ⑰ Ibid., 188 ab.
- ⑱ Ibid., 189 a.
- ⑲ Ibid., 188 a.
- ⑳ Ibid., 181 cd.
- ㉑ Ibid., 197 d.
- ㉒ Ibid., 186 a.

- (22)
- ① Platon, *Techniques*, 182 a.
- ② Ibid., 184 b.
- ③ Ibid., 184 c.
- ④ Ditto.
- ⑤ Ibid., 184 d.
- ⑥ Ibid., 185 a.
- ⑦ Ditto.
- ⑧ Ibid., 185 b.